

A—14 味覚に関する調査研究(その1)
—青少年の味覚感度の地域差
(東京都・山梨県)について—

山梨大教育 小林 豊子
文化女大家政 ○土屋 治美

1. 嗜好の基盤になる要因としての味覚感度が西丸、吉川氏の調査研究の結果などから類推して、地域差を示すであろうとの予想のもとに東京都と山梨県の青少年のそれについて比較する目的で調査研究をおこなった。あわせて年令差、性差の有無についても検討を加えた。

2. 調査対象は東京都及び山梨県の小5、中3、高3の男女それぞれ約100名、合計1226名で昭和45年6月に実施した。調査方法は西丸氏らの濾紙法(呈味物質の溶液に濾紙を浸漬して乾燥したものを味わう)に準じ、呈味物質及び濃度(%)は、甘味(蔗糖 2.5, 2), 酸味(クエン酸 0.5, 0.4), 塩味(塩化ナトリウム 0.72, 0.576), 苦味(硫酸キニーネ 0.0096, 0.0077), 旨味(グルタミン酸ソーダ 0.8, 0.64)で、これに味盲物質(フェニールチオ尿素 0.008%)及び無処理濾紙(東洋濾紙 No. 50)を加え、12枚一組として調査用紙と共に配布した。昼食前1時間位の範囲の時間帯で実施し、独自の表現により調査用紙に記入させ回収した(回収率 100%)。

3. (i)地域差: のべ正答率は東京66.9%, 山梨59.3%で、味別では甘(中3男), 酸(小5男女, 中3男女), 苦(小5男女, 中3男女, 高3男), 旨(小5男女, 中3女)は東京が、塩(中3女)は山梨が高く、0.1~5%の危険率で有意差がみられた。味盲物質は東京中3女が高く5%の危険率で有意であった。(ii)年令差: のべ正答率(%), 小5—69.7, 中3—67.2, 高3—54.2である。(iii)性差: のべ正答率(%), 男60.9, 女65.4で女子が高く個別の味についても塩味を除き同様の傾向であった。